

第三十二回江戸川乱歩賞受賞作

# 花園の

山崎洋子

# 迷宮

# 花園の迷宮

第三十二回江戸川乱歩賞受賞作

山崎洋子

フ

ロ

ロ

一

ム

一

一

ハ

ク

フ

ロ

ロ

一

ム

一

一

ハ

ク

フ

ロ

ロ

一

ム

一

一

ハ

ク

観音様を拝んで仲見せをひやかす人

もないのに、こころは終日賑わいか絶

著日盛り、こころは故早か、浅草を

一  
一  
ハ  
ク

# 花園の迷宮

昭和六十一年九月十日 第一刷発行

定価 一〇〇〇円

著者 山崎洋子

発行者 野間惟道

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―二／郵便番号一―二―二  
電話・東京(〇三)九四五―一―二(大代表)

印刷所 株式会社廣済堂

製本所 黒柳製本株式会社

©山崎洋子 一九八六年 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り下さい。送料小社負担にてお取り替えます。



ISBN4-06-202969-3 (0) (文2)

# 花園の迷宮 目次

|                         |     |
|-------------------------|-----|
| プロローグ                   | 5   |
| 第一章 隠花                  | 13  |
| 第二章 妖影                  | 35  |
| 第三章 迷蝶                  | 94  |
| 第四章 狂宴                  | 111 |
| 第五章 眩暈                  | 165 |
| 第六章 鬼謀                  | 201 |
| 第七章 蒼炎                  | 217 |
| エピソード                   | 309 |
| 江戸川乱歩賞の沿革及び本年度の選考経過     | 314 |
| 江戸川乱歩賞授賞リスト             | 319 |
| 第三十三回(昭和六十二年)江戸川乱歩賞応募規定 | 320 |

装帧  
辰巳四郎

# 花園の迷宮



## プロローグ

昭和七年・東京。

七月の暑い日盛り。ひとりの男が、浅草を歩いていた。

祭りでもないのに、ここは終日賑わいが絶えない。

名物の観音様を拝んで仲見世をひやかす人、日本一といわれる盛り場へくり出す人、色街の吉原から流れてくる人。

その人波をぬって、男は六区の方へ足を急がせる。

この年、世相は暗かった。

第一次世界大戦後の金融恐慌が日本をも襲い、ひどい不景気が続いている。

街には失業者が溢れ、農村は文字通りの飢餓状態。

あちこちでストライキの旗が上がり、左翼運動が地下の根をじりじりと広げていく。

怪しげな新興宗教も林立し、断末魔の政府は、片はしから容赦ない弾圧を加えていった。泥沼の中で、当然のようにテロが横行する。



二月には前蔵相・井上準之助が、三月には三井合名理事長・団琢磨が、一人一殺をスローガンとする血盟団によって射殺されている。

五月には当時の首相であった犬養毅が、陸海軍青年将校のクーデターによって射殺された。

そして、昭和六年の満洲事変に続いて、この年一月に第一次上海事変勃発。  
国内外共に、日本は救われざる嵐の中へ突入しようとしていた。

だからこそ、人々は刹那的な快楽を求め、花街へ、盛り場へと押し寄せる。

浅草には、そういう人々の求めるものがすべてあった。

特に六区――。

カフェー・ダンスホール・麻雀荘、安くてうまい食べ物屋、映画館、芝居小屋、劇場、路上の実演――。

中でもレビューや軽演劇の人氣はすさまじい。

ターキーこと水の江滝子を中心とする松竹少女歌劇、浅草の喜劇王といわれた曾我廼家五九郎の五九郎劇団、初代・清水金一座に古川緑波、そしてエノケンこと榎本健一のミュージカル・コメディ。

ここはエロティシズムと笑いの別天地だ。

六区へ入った男は、松竹座の前で立ち止まった。飛白の着物に烏打帽、男はどこかの店員のように見えた。

年は二十五歳くらい。色白で、女にもてそうなやさ男だ。

松竹座には、人氣絶調のエノケンが出演していた。木内興業から松竹座へ移ったエノケンの、

## 第一回公演だ。

男は懐中時計を出し、時間を確かめた。

それから、看板の演し物を改めるでもなく、切符を買って劇場へ入っていった。

客席は超満員だった。男は後ろの立ち見客の中へもぐり込み、舞台ではなく周囲を見回した。舞台では、名作となった「最後の伝令」が演じられていた。

ある小さな劇団が、「最後の伝令」という芝居を即席でつくり、一人何役かで大騒ぎしながら演じる、という喜劇だ。

エノケンの絶妙な演技と、一人数役のおかしさで、客席は沸きに沸いている。

しかし、その男だけは笑わなかった。

客席の後ろに渡した木の手すりにつかまり、落ち着かない顔で左右に眼を配っている。

小柄な体で舞台狭しと走り回るエノケン。

爆笑と拍手。

何度かそれが繰り返され、やがて幕が降りた。

客は笑いをまだ顔にはりつかせたまま、幕間に便所へ行ったり食べ物や飲み物を買った。立ち見客の群れも、ざわめきながら思い思いの方向に散った。

だが、その男だけは手すりに体をもたせかけたまま動かなかった。

「あッ」

と、誰かが叫んで、男の方を指さした。

男の背中、ちょうど心臓のあたりから、包丁の柄が生えていた。その下に、どろりと赤いものも流れている。

人々はいまいまいな顔で男を眺めた。中には笑っている者もいた。

普段ならゾツとする光景だが、場合が場合だけに、かえって滑稽に見える。

これも劇場のしかけた余興だと、多くの人が思った。

ひょうきん者がすぐ手を伸ばして、男の脇腹をくすぐった。

それでも動かないので、肩をぐいと押した。

男の体は床にたたきつけられるように倒れた。

反動で男の首がねじ曲がり、カッと見開かれた眼が取り囲む人々をうつろに睨んだ。

一瞬の静寂の後、誰かが鋭い悲鳴を上げた。

するとたちまち、悲鳴と泣き声の洪水となった。

劇場支配人が駆けつけ、「警察を！」とわめいた。

余興などではない。まぎれもない殺人事件だった。

男の所持していた財布に、故郷の親から来た葉書があった。おかげで身許はじきわかった。

神田にある大きな古書店の店員だった。

犯人が立ち見客の中にいたことは確かだ。

が、殺人事件らしいとわかるやいなや、巻きこまれるのがいやな客は、みな劇場を出てしまった。

古書店店主の話では、被害者が誰かに恨まれていた様子もない。通いだったから私生活まではわからないが、おとなしい真面目な男だったという。

ただ、人とあまりつきあう方ではなく、特に親しかった者も見あたらない。

故郷は長野だが、十六で上京して以来、そこへもほとんど帰っていなかった。湯島の下宿屋でも、もの静かな文学青年という以外、何もわからない。

見逃せないものがひとつあった。

一枚の紙切れだ。

それは、男の着ていた着物の袂たもとから出てきた。

天満団てんまんだん、という鉛筆文字が、その紙切れにはあった。あとは、日付けと神楽坂にあるNという料亭名。

さっそく特別高等警察——いわゆる特高に連絡がいった。天満団というのは、満洲独立を狙う反政府グループだったからだ。

満洲というのは、中国東北地方の三省——奉天・吉林・黒竜江をさす総称である。

昭和三年、満洲軍閥の首領・張作霖の乗った軍用列車が爆破され、張作霖が爆死するという事件がおきた。

次いで昭和六年、奉天郊外柳条湖付近で、満鉄線が爆破された。

いずれも支那軍の仕業とされ、日本の満洲駐留部隊であった関東軍は「暴徒を制圧し、現地の日本人居留民を守る」という名目で兵を起こした。

実は両事件とも、満洲攻略の口実づくりに関東軍自身が仕掛けたものだった。

日本経済の行きづまり、資源問題、人口問題を解決するには、豊かな大地である「満蒙」まんもうを手に入れるしかない。そのためにはどんな手段を使っても、というのが、関東軍の考えだった。

あらかじめ用意されていたのだから、ひとたび兵を起こせばあとは早い。

日本軍は満洲の主要地を次々と占領し、七年三月、「満洲国建設宣言」をだした。

清朝十二代廢帝の宣統帝溥儀氏を頭首に据え、表向きは滿洲人民による自發的新國家ということになっている。

しかし實際はもちろん日本による日本のための領土である。

この暴挙を許すなど、支那各地で激しい排日運動がおきていた。

日本軍はそうしたゲリラ部隊のことを、匪族とよび、制圧にこれつとめている。

ところが、この匪族と手を結び、日本軍のひもつきではない「独立國滿洲」をつくろうとする日本人グループが、いくつかできていた。

互いに主義主張が違ふから、彼等が一致団結することはない。

天滿團というのは、こうしたグループのひとつだった。

「万人平等の理想國家」が、天滿團のスローガンだった。

特高がつかんだ情報によると、メンバーは三十人程度。そのうち半数は、すでに滿洲で生活している人間だ。

スローガンは華々しいが、ほとんど実行能力のないグループ、とみて、軍も特高もつい最近まで無視していた。

ところが、グループに共鳴したある老資産家が、七万円という大金をポンと提供した。

大卒の初任給が四、五十円の時代だ。七万円といえば、現代なら億の単位になるだろう。

特高がこの情報をつかんだ。小グループとはいえ、資金ができたとなれば放っておけない。

この不景氣な時代、わずかの金で命を売る輩が、日本にも滿洲にも掃いて捨てるほどいた。

土地や家作を処分して作った七万円は、いったん銀行に入れられ、数日後に全額引き出されて

いる。

老資産家は特高の厳しい取り調べを受けた。

が、金を天満団に渡したことは認めたものの、具体的なメンバーの名前については、がんとして口を割らない。

そのうちこの老資産家が、疲労のため死亡するという最悪の事態となった。

古書店の店員が殺され、彼の袂たもとから「天満団」という文字のあるメモが発見されたのは、そんな時である。

日付は二日後になっていた。

メモにある料亭に問いあわせると、その日の夜、東京文芸研究会という名で会合予約が入っているという。

天満団の会合だ、と特高は確信し、その日時、料亭を張り込んだ。

十人の男女が集り、料理が出る前に逮捕された。

やはり彼等は天満団のメンバーだった。

拷問を混じえた取り調べの結果、次のようなことがわかった。

殺された古書店店員は、天満団のレポ役だ。

が、しかし誰に、なぜ殺されたのかは、逮捕された団員たちにもわからない。

まして、なぜ彼が今夜の会合のことを、わざわざわかりやすいメモにして持っていたのか、見当もつかない。

だから、団員たちは、警察が今夜の会合のことを知っているとは思ってもよらなかった。

また、老資産家の財産は、井原・藤堂という二人の幹部が持っており、彼等は近々満洲へ、そ

れを持って渡る予定だ。

二人とも会合に現れる筈<sup>はず</sup>だったのに、なぜか姿を見せていない。警察の張り込みを、彼等だけは察知したとも考えられる。

井原・藤堂の行方はわからなかったが、特高は二人の顔写真を入手した。

それを元にして全国の警察、主要な港に、さっそく手配書が回された。

事件から約一週間たった七月の末、二人の少女が、若狭<sup>わかさ</sup>の山村から横浜へと旅立った。

二人とも親に売られ、これから娼妓<sup>しょうぎ</sup>となる身だった。

天満団どころか、どんな主義思想とも無縁の存在である。

にも関わらず、浅草・六区から始まった呪わしい一連の事件が、二人の運命を大きく変えた。死と、人の裏側に隠された恐ろしい秘密が、二人を待っていた。

日中戦争前夜——日毎に高くなる軍靴<sup>ぐんか</sup>の響きを、国民の多くが希望と錯覚していた頃のことである。

## 第一章 隠花

### 一

ぼんぼりの明かりに「福寿」という文字が浮かんでいた。

高い黒板塀が、楼の内を隠すように取り囲んでいる。

門を入ると、丸い敷石が玄関へと人をいざなう。

戸を開け放ったその奥は、大きなガラスをはめ殺しにした張り店だ。

鬘を島田や兵庫に結い、あでやかな裃袴をまとった娼妓たちが、雛人形のように並んでいる。どこからか三昧の音が聞こえていた。

「おい、こっちだ」

周旋屋の中村が呼んだ。

張り店に氣をとられていたふみと美津は、あわててその後へ従う。

広い中庭をはさんで玄関と反対の側に、もうひとつ入口があった。

そこを上がると、すぐが帳場で、玄関や門の出入りが一眼で見渡せる。

「はい、ご苦労さん、そっちでお待ちだよ」



中村の顔を見た帳場さんが、奥の方へ顎をしゃくった。

「どうも、お世話になっておりやす」

中村は腰を折って愛想笑いを返す。

そのままふみと美津の方へ振り向き、低い声で囁いた。

「品よくするんだぞ。この店は、真金町でも一流なんだからな」

楼は、七十坪ほどの中庭を、回の字型に取り囲んだ二階屋だった。

外から見るとよりずっと広い。

二間幅の檜廊下は、中庭に面した側がすべてガラス障子だった。

新造に案内された客が、玄関側の廊下に行くのが見える。

中村に連れられたふみと美津は、帳場の隣室へ入った。

八畳ほどの部屋で、棧も柱も匂うような檜だ。

長火鉢のむこうに老女が一人いて、しゃしゃかど掻き氷を食べていた。

ちりめん皺だらけの、小さな老女だった。

しかし形がすごい。

すぐに髪とわかる大丸髷に、夏景色を総刺繍でいれた生麻の着物、帯は薄紅の朝顔を描いた白の紹つづれだ。

老女は掻き氷をすくいながら、ジロリと眼だけ上げた。異様に大きな眼だった。

顔が小づくりの逆三角形なので、猫そっくりに見える。

「どうもお民さん、お邪魔いたしやす」

中村は敷居際に坐り、老女にいてねいな挨拶をした。